

光籃

泉鏡花

青空文庫

田舎いなかの娘であらう。縞柄しまがらも分らない筒袖つつっぽの古浴衣ふるゆかたに、煮に

染しめたやうな手拭てぬぐいを頬被ほおかぶりして、水の中に立つたのは。……

それを其そのまゝに見えるけれど、如何いかに奇を好めばと云つても、

女の形に案山子かかしこしらを拵こしらへるものはない。

盂蘭盆うらぼんすぎの良い月であつた。風はないが、白露しらつゆの蘆あしに満ち

たのが、穂ほに似て、細流せせらぎに揺れて、雫しずくが、青い葉、青い茎つたわを伝

つて、点滴したたるばかりである。

町を流るゝ大川おおかわの、下の小橋こばしを、もつと此処ここは下流に成る。

やがて瀉かたへ落ちる川かわぐち口で、此この田つゞきの小流こながれとの間あいだには、

一寸ちよつと高く築きずいた塘堤どてがあるが、初夜しよや過ぎて町は遠し、村も静しずまつ

た。場末の湿地で、藁屋の侘しい処だから、塘堤一杯の月影も、

破窓をさす貧しい台所の棚の明るい趣がある。

遠近の森に棲む、狐か狸か、と見るのが相応しいまで、もの

さびて、のそくと歩行く犬さへ、梁を走る古鼠かと思はるゝ

のに――

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ――

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ――

小豆あずきあらひと云ふ変化へんげを想はせる。……夜中に洗濯の音を立て

るのは、小流こながれに浸つた、案山子あかし同様の其の娘だ。……

霧きりの這ふ田川たがわの水を、ほの白い、箆やるで搔かきく、泡沫あわを薄青く

掬すくひ取つては、細帯ほそおびにつけた畚びくの中へ、ト腰ひねを捻ぎまり状じょうに、ざあ

と、光に照らして移し込む。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ——

おなじ事を繰返す。腰の影は蘆あしの葉に浮いて、さながら黒く踊るかと見えた。

町の方から、がやくくと、婦おんなまじりの四五人の声こゑが、浮いた登あ音しおととともに塘堤どてをつたつて、風の留とまつた影燈籠かげどうろうのやうに近づいて、

「何だ、何だ。」

「あゝ、行やつてるなあ。」

と、なぞへに蘆の上から、下のその小流こながれを見て、一同たちどに立留まつた。

「うまく行るぜ。」

「真似をする処は、狐か、狸だらうぜ。それ、お前によく似て居

らあ。」

「可厭。」

と甘たれた声を揚げて、男に摺寄つたのは少い女で。

「かわうそ 瀬だんべい、水の中ぢや。」

と、いまの若いのの声に浮かれた調子で、面をつら 洗黒くニヤノ

と笑つて、あとに立つたのが、のそくと出たのは、一挺のちようろ 艦

と、かんでらをぶら下げた年としばい 倍な船頭である。

此の唯一つのただ 灯が、四五人の真中へ入つたら、影燈籠は、再

び月下に、其のまゝくるくと廻るであらう。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ——

髪を当世にした、濃い白粉おしろいの大柄としまの年増が、

「おい、姉さんねえ。」

と、肩幅だて広く、塘堤あぶちへ頭あはれた。立女形たておやまが出たから、心

得たのであらう、船頭ゆかため、かんでらの灯ひを、其の胸のあたりへ突

出した。首くびぬき拔ゆかたの浴衣あさぎに、浅葱こんと紺いしまつの石松だてまきの伊達巻ねばかり、寝

衣まきのなりで来たらしい。恚こう照てされると、眉毛まゆげは濃く、顔おおきは大い。

此処ここから余り遠くない、場末ばうぎの某座ほんざに五日間の興行きやうぎやうに大当りを取

つた、安来節座やすぎぶしざちゆう中の女太夫おんなたゆうである。

あとも一座で。……今夜、五日目の大入おおいりを刎はねたあとを、涼すず

みながら船やつばがたを八葉やつばがた漕かへ浮べようとして出て来たのだが、しこみ

ものの鮓すし、煮染にしめ、罫びんつめの酒で月を見るより、心こころてん 太たか安あいア
イスクリームで、蚊帳かやで寝た方がいゝ、あとの女たちや、雑用ぞうよう
宿やどを宿場しゆくばへ浮うかれ出だす他ほかの男どもは誰も来ない。また来ない方
の人数にんずが多かつた。

「おい、お前まいさん。」

と、太夫たゆうの年増としまは、つゞけて鷹揚おうように、娘を呼んだ。

ながれ
流ながれの案山子かかしは、……ざぶりと、手を留とめた。が、少しは気取り
でもする事か、棒杭ぼうぐいに引ひかゝつた菜葉なつばの如く、たくしあげた裾すそ
の上へ、据腰すえこしに箆ざるを構へて、頬ほお被かりの面おもてを向けた。目鼻立めはなだち
は美しい。で、濡れぬれくとして艶つやある脛はぎは、蘆間あしまに眠る白鷺しらさぎの
やうに霧を分けて白く長かつた。

「感心——なか／＼うまいがね、少し手が違つてるよ。……さん
 子さん、一寸唄つてお遣り。ちよつとうた村方むらかたで真似をするのに、いゝ手
 本だ。……まうけさして貰つたもら礼心れいごころに、ちゃんとした処ところを教
 へてあげよう。置土産おきみやげさ、さん子さん、お唄ひよ。」
 「可厭いやかわうそ、獺わかに。……気味が悪いわ、口うつしに成るぢやないの。」
 と少わかいのが首とともに肩を振る。

「獺わかに教へれば、芸の威光さ。ぢやあ、私が唄ひながら。——可い
 いかい、——安来千軒名やすぎせんげんの出た処ところ……」

もう尤ももつと微醉ほろよ機嫌で、

「さあ、遣つて御覧よ。……鱒どじょうすくひさ。」

「ほゝゝ。」

と娘は唯ただ笑つた。

月にも、霧にも、流ながれの音にも、一座の声は、果敢はかなき蛾ひとりむしのやうに、ちらくくと乱るゝのに、娘の笑わらい声こえのみ、水に沈んで、月影の森に遠く響いた。

「一寸ちよつと、お遣りつたら。」

「ほゝゝ。」

「笑つてないでさ、可いいかい。——鱒ますすくひの骨髓ところと言ふ処ところを教へるからよ。」

「あれ、私はな、鱒ますすくふのでござんせぬ。」

「おや、何なにをしてるんだね。」

「お月様の影かげを掬すくひますの。」

と空を仰いで言つた。蘆の葉の露は輝いたのである。

「月影を……」

「あはゝ、などと言つて、此奴、色男と共稼ぎに汚穢取りの稽古で居やがる。」

と色の黒い小男が笑出すと、角面の薄化粧した座長、でつ

ぷりした男が、

「月を汲んで何にするんだ。」

「はあ、暗の夜の用心になあ。」

此奴は薄馬鹿だと思つたさうである。後での話だが——些と狐が憑いて居るとも思つたさうで。……そのいづれにせよ、此の色なら、肉の白さだけでも、客は引ける。金まうけと、座長の

角面はさつそくに思慮ふんべつした。且つ誘拐いざなふに術ては要いらない。

「分つたく、えらいよお前まいは——暗夜やみよの用心すくに月の光を掬すくつて

置くと、箴さるの目から、ざあく洩もると、畚びくから、ぽたく流れる

と、ついでに愛あい嬌きようはこぼれると、な。……此の位世の中に理り

窟くつの分つた事はねえ。感心だ。——処ところでな、おい、姉あねえ。おなじ

月影を汲むなら、そんなぢよろしく水でなしに、瀉かたへ出て、そら、

ほつと霧のかゝつた、あの、其処そこの山ほど大きく汲みな。一いっしよ所

に來な、連れて行くぜ。」

おんなたゆう

女太夫に目くばせしながら、

「俺たちは、その月を見に瀉へ出るんだ。——一所に來なよ、御ご

馳走ちそうも、うんとあらあ。」

「ほう、来るかく、猫よりもおとなしい。いまのまに出世をするぜ、いゝ娘だ、いゝ娘だ。」

と黒い小男が囁した。

娘は、もう蘆を分けて出たのである。露にしつとりと萎へた姿も、水には濡れて居なかつた。

すぐ川堤を、十歩ばかり戻り気味に、下へ、大川へ下口があつて、船着に成つて居る。時に三艘ばかり流に並んで、岸の猫柳に浮いて居た。

(さんがいまんりよう　しよぎようむじよう
三　界　万　霊、　諸　行　無　常。)

鼠にぼやけた白い旗が、もやひに搦んで、ひよろくと漾ふの
が見えた。

「おやく、塔婆とうばも一本、流れ灌頂かんちようと云ふ奴だ。……大變なものに乗せるんだな。」

座長まっが真さきまっにのりかゝつて、ぎよつとした。三艘さんぞうのうちの、

一番大形おおがたに見える真中の船であつた。

が、船ふなべりを舐なめて這はふやうに、船頭ふなづねがかんてらを入れたのは、端はたの方の古船ふるふねで。

「旦那だんな、此方こつちだよ。……へい、其それは流れ灌頂ではござりましねえ。昨日きのう、盂蘭盆うらぼんで川かわ施せ餓鬼がきがござりましたでや。」

「流れ灌頂と兄弟分だ。」

「可厭いやだわねえ。」

「蓮いぢれん托たくし生しょうと、さあ、皆みんな乗つたか。」

と座長が捌く。

「小父さん、船幽霊は出ないこと。」

と若い女が、ぢやぶく、ぢやぶくと乗出す中に、怯えた声する。

兀げたのだらう。月に青道心のやうで、さつきから黙り家の老人が、

「船幽霊は大海のものだ。潟にはねえなあ。」

「あれば生擒つて銭儲けだ。」

ぎい、ちよん、ぎい、ちよんと、堤の草に蟋蟀の紛れて鳴

くのが、やがて分れて、大川に唯艫の音のみ、ぎい、と響く。ぎよ、ぎよと鳴くのは五位鷺だらう。

「なむあみだぶつ。あゝ、いゝ月だ。」

と寂しく掉つた、青道心の爺の頭は、ぶくりと白茄子が浮いたやうで、川幅は左右へ展げ、船は霧に包まれた。

「変な、月のほめやうだな、はゝゝ。」

と座長は笑ひ消しつつ、

「おい、姉や、何うした。」

と言ふ。水しやくひの娘は、剥いた玉子を包みあへぬ、あせた緋金巾を掻合せて、鵜が赤い魚を銜へたやうに、舳にとぼんと留つて薄黒い。通例だと卑下をしても、あとから乗つて艦の方にあるべき筈を、勝手に知つた土地のもの所の為だらう。出しなに、川施餓鬼で迷つた時、船頭が入れたかんでらの火より前に乗

つて、舳にちよこなんと控へたのであつた。

実は、此これは心すべき事だつた。……船につくあやかしは、魔の影も、鬼火も、燃ゆる燐りんも、可おそろし恐おそろしき星の光も、皆、ものの尖せんた端んへ来て掛かるのが例だと言ふから。

やがて、其しるしの験しるしがある。

時に、さすがに、娘むすめ氣きの慇いん懃ぎん心ごころか、あらためて呼ばれたので、頬ほ被おりした手拭てぬぐいを取つて、俯うつむいた。

「あら、きれい。」

「まあ、光るわねえ。」

やすぎやすぎ安来やすきぶしの婦おんなは、驚おどろ駭きの声を合せた。

「一寸ちよつと、何、其かんざしの簪かんざしは。」

いちようがえし
銀杏返もぐしやくくに、掴んで束ねた黒髪に、琴柱形して、晃々と猶ほ月光に照映へる。

「お見せ。」……とも言はず、女太夫が、間近から手を伸すと、

逆らふ状もなく、頬を横に、鬢を柔順に、膝の皿に手を置いて、

「ほゝゝゝ。」

と、薄馬鹿が馬鹿笑に笑つたのである。

年増は思はず、手を引いて、

「えゝ、何だねえ、気味の悪い。」

生暖い、腥い、いやに冷く、かび臭い風が、颯と渡ると、箕

で溢すやうに月前に灰汁が掛つた。

川は三つの瀬を一つに、どんよりと落合つて、八葉瀉の波は、

ならかなながら、八つに打つ……星の洲を埋んだ銀河が流れて漂
ようびよう
 渺たる月界に入らんとする、恰も瀉へ出口の処で、その一陣
 の風に、曇ると見る間に、群りかさなる黒雲は、さながら裾の
こくう
 なき滝の虚空に漲るかあやしと怪まれ、暗雲忽ち陰惨として、灰に血
ま
 を交ぜた雨が飛んだ。

「船頭さんく。」

「お船頭々々。」

と青坊主は、異変を恐れて、船頭に敬意を表した。
あおぼうず

「苦があるで。」

「や、苦どころかい。」

「あれ、降つて来た、降つて来た。」

声を聞いて、飛ぶ鷺を想つたやうに、浪の羽が高く煽る。

「着ける、着ける、早くつけてくれ。」

昼は潟魚の市も小さく立つ。——村の若い衆の遊び処へ、艀数三十とはなかつたから、船の難はなかつた。が、堤尻を駈上つて、掛茶屋を、やゝ念入りな、間近な一ぜんめし屋へ飛込んだ時は、此の十七日の月の氣勢も留めぬ、さながらの闇夜と成つて、篠つく雨に風が荒んだ。

侘しい電燈さへ、一点燭の影もない。

めし屋の亭主は、行燈とも、蠟燭とも言はず、真裸で

慌て惑つて、

「お仏壇へ線香ぢや、線香ぢや。」

と、ふんどしを絞つて喚わめいた。

慙かかる田舎いなかも、文明ぶんめいに馴なれて、近頃ちかごろは……余分あまには蠟燭ろうそくの用意よういもないのである。

「……然そうだ、姉あねえ。慙こう言いふ時ときだ、掬しやくつた月影つきかげは何どうしたい。」
と、座長ざちやうの角面かくづらが、つゞけ状さまに舌打したうちをしながら言いつた。

「真ほん個とうだわ。」

「まつたくさ。」

太夫たゆうたちも声こゑを合あせた。

不思議ふしぎに、螢火ほたるびの消きえないやうに、小こさな簪かんざしのほのめくのを、雨あめと風かぜと、人ひとと水みづの香かと、入乱いりみだれた、真暗まつくらな土間どまに微かすかに認かめたのである。

「あゝ、うつかりして忘れて居ました。船へ置いて来た、取つて来ませう。」

「ついでに、重詰じゆうづめを願ひてえ。一升罌いっしょうびんは攫さらつて来た。」

と黒男くろおとこが、うは言ごとのやうに言ふ間まもあらせず、

「やあ、水が来た、波が来た。……薄馬鹿うすばかが水に乗つて来た。」
と青坊主あおぼうずがひよろ／＼と爪立つまだつて逃げあるく。

「お仏壇ぢや、お仏壇ぢや、お仏壇へ線香ぢや。」

「はい、取つて来ましたよ。」

と言ふ、娘の手にした畚びくを溢あふれて、湧わく影は、青いさゝ蟹かにの群れて輝くばかりである。

「光を……月を……影を……今。」

と凜りんと言ふと、畚を取つて身構へた。向へる壁の煤すすも破やれれめも、はや、ほの明るく映さるゝそのたゞ中へ、袂たもとを払つてパツと投げた。間まは一面に白く光つた、古ふる 畳たたみの目は一つ一つ針を植ゑたやうである。

「あれ。」

「可こ恐わい、電いなびかり。」

と女たちは、入はいりもやらず、土間どまから框かまちへ、背せな、肩を橋にひれ伏した。

「ほゝゝ、可こ恐わいの？」

娘は静しずかに、其の壁に向つて立つと、指をしなやかに簪かんざしを取つた。照らす光こうみょう明みに正まさに視みる、簪おのは小さな斧であつた。

斧を取つて、唯一面の光を、端から、丁と打ち、丁と削り、こ
 とくことくと敲くと、その削りかけは、はらくと、光る柳
 の葉、輝く桂の実にこぼれて、畳にしき、土間に散り、はた且う
 つくしき工人の腰にまとひ、肩に乱れた。と見るく風に従つて、
 皆消えつつ、やがて、一輪、寸毫を違へざる十七日の月は、壁
 の面に掛つたのである。

残れる、其の柳、其の桂は、玉にて縫へる白銀の蓑の如く、
 腕の雪、白脛もあらはに長く、斧を片手に、掌にその月を捧げ
 て立てる姿は、渦も川も爪さきに捌く、銀河に紫陽花の花籠を、
 かざして立てる女神であつた。

かえり
顧みて、

「ほゝゝ。」

微笑むと斉しく、姿は消えた。

壁の裏が行方であらう。その破目に、十七日の月は西に傾いたが、夜深く照りまさつて、拭ふべき霧もかけず、雨も風もあともない。

這へる蔦の白露が浮いて、村遠き森が沈んだ。

皎々として、夏も覚えぬ。夜ふけのつゝみを、一行は舟を捨てて、鯰と、鰯とが、寺詣をする状に、しよぼくと辿つて帰つた。

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ——

ざぶり、

ざぶり、

ざぶく、

ざあ——

「しいツ。」

「此処だ……」

「先刻の処。」

と、声の下で、囁きつれると、船頭が真先に、続いて青坊主が四つに這つたのである。

——後に、一座の女たち——八人居た——楽屋一同、揃つて、刃を磨いた斧の簪をさした。が、夜寝ると、油、白粉の淵に、藻の乱るゝ如く、黒髪を散らして七転八倒する。

「痛い。」

「痛い。」

「苦しい。」

「痛いよう。」

「苦しい。」

唯一人……脛すらりと、色白く、面長な、目の涼しい、年紀十九で、唄もふしも何にも出来ない、総踊りの時、半裸体に蓑をつけて、櫛をついてまはるばかりのあはれな娘のみ、斧を簪して仔細ない。髪にきらりと輝くきれいさ。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「苦楽」

1924（大正13）年5月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※初出時の表題は「鱒すくひ」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

光籃 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>